プレゼンテーション
SDGs円卓会議（2026年1月16日）
ガイディング・クエスチョンへの応答

SDGs円卓会議構成員
グローバルヘルス市民社会ネットワーク　代表
稲場雅紀

SDGsを取り巻く状況＝混沌
「SDGs延長」ならレームダックに？

SDGsが受ける挑戦

- ◆ 差し迫る「地球の限界」
- ◆ 世界のガバナンス：「ゴール16」（参画型民主主義）の無残な崩壊
- ◆ 「世界の持続可能性」への思想的な挑戦（一国主義、「終末論＋千年王国」、シンギュラリティへの「加速主義」等）
- ◆ SDGsはモメンタムを失った状態

結果としてSDGsを選び直すにしても、
日本全体＋グローバルに再考し、再定義する機会を持つことは必要

◆ SDGsの設計上の限界の乗り越え

- SDGsには「プランB」がない：ポストSDGsには、全体を後退させるような破局的事態（例：コロナ＋ポスト・コロナ）に対処する別のシナリオが必要。
- SDGsで不十分な「高齢化・少子化・人口減」に関する目標・ターゲット・シナリオが必要
- 同様に、災害についても重要性の認識が弱い
- 包括性・統合性がベースなのに、人道危機の克服や「平和」・「軍縮」（含：核軍縮）がない⇒導入必要
- 「欺瞞」「Woke」「きれいごと」批判への耐性強化

◆ SDGsの「時代的制約」の乗り越え

- ➢ デジタル化、AIの全面的導入⇒いわゆる「ソサエティ5.0」が「想定」と似て非なる形で到来
  - デジタル空間での偽情報・陰謀論の席巻とそれを利用する思想的潮流（暗黒啓蒙・加速主義）
  - 膨大なエネルギー消費（2030年には「地球二個分」の世界に）：気候変動や環境汚染の加速化の懸念
- ➢ 2015年に未想定の現実や未来ビジョンへの対処
  - 例：テクノ・リバタリアニズムによる普遍的人権論の否定にどう対峙するか
- ➢ 科学技術イノベーションへの総合的な原則と政策ビジョン（技術移転や公平性、予防原則等）が必要

日本のSDGs：2030年に向けて「持続可能性」概念の再生が必要

日本の状況：「今までの日本」の「持続可能」は八方ふさがり

少子高齢化、多額の債務、円安＝国際的地位の相対的凋落があらわに
一生懸命やっても先行きの希望が持てない：不当に「弱く小さく貧しい国」にさせられたという被害者意識

「持続可能な日本」への変革を目指す日本のSDGs推進を蝕む3要素

◆ 「SDGs=リサイクル＋ゴミ拾い＋節約」が一般的理解。全体像（貧困をなくす、公正な経済、ガバナンスなど）への理解はほぼなし。危機を未然に防ぎ持続可能にする「安全保障」の側面は一顧だにされていない

疎外（取り残し）

コロナ後インフレ等の中で、一般の人々の多くが「自分たちこそ顧みられていない」と自己認識

- 「持続可能な社会」への変革に向けた政策への反感
- 社会保障制度のコストと「今の自分たち」への不利益に反感

欺瞞（SDGsウォッシュ）

「SDGsウォッシュへの懸念」はSDGs関係者には一定共有されているが、実際には防げていない

- 実際に問題のある事業も相当存在する
- 陰謀論や偽情報と相まって、「欺瞞」イメージを持たれやすい

公正性・透明性・参画性

「疎外」との関係で、「多くの人々が知らないところで物事が決められている」感覚⇒不信感が増幅

- 偽情報・陰謀論と相まって、「利権」と誤解（例：いわゆる「メガソーラー問題」）
- 参加感がない⇒不信を生む

SDGs推進への「一般の人々の理解と共感」を再建することが必要

SDGsを中心政策に置き直し、「持続可能な日本」のさらなる追求を

- ◆ ジェンダー平等
- ◆ 多文化共生
- ◆ 社会保障の再生
- ◆ 貧困・格差の是正

道を誤れば「亡国」に

SDGs・持続可能性　イメージの再定義が必要（例：災害・セキュリティとの関係＝SDGsは「危機」に対する中期・長期の安全保障）

「疎外」へのアプローチが必要：自分の知らないところで誰かが決めている、という感覚を払拭する＜参加型＞アプローチの模索、メディア・SNSの役割を検討

陰謀論・偽情報への対処、被害者意識や負のナショナリズムの克服、政策の立案・決定の公正性・透明性・参画性の確保が重要。

変化を生み出しているゴール等の実績をアピールし、さらに強化しつつ、成果が不十分なゴールは革新的手法で取り組む。レビューをベースにした取り組み強化。